

## 4 古典、現代建築歴訪の旅

### 4.4 イタリアの建築

後戻りは出来ない。下るしかない。谷底に吸い込まれていくようであった。ゆっくり、ゆっくり、ローギヤーに入れて、ブレーキを踏み続けて山道を下りだした。だんだん雪が少なくなってきた。そして、ついにイタリアの小さな山里の村にたどり着いた。九死に一生を得た思いだった。本当にうれしかった。そしてイタリアで一番大きいといわれる大聖堂と広場のあるミラノに着いた。ミラノで見た超高層の建物が二つあった。一つはベラスカタワーという18階建ての、上層部のフロアーが飛び出し、構造体を強調したタワーの建物と、31階建ての舟形をしたフロアープランのペレリービルで、細長くしなやかに建っている。1950年代のほぼ同じ年に創られている。男と女のシンボルを意図するかの様に抽象的に形どられた建築がバランスとるかの様な表現が面白かった。

アルプスの南側、地中海に面したイタリアの街々は、明るく、解放的でどの街も、建物ひとつひとつ美しいというだけでなく、街全体が自然と調和しあっていて美しいのだ。昔から長く保存されている、伝統的な街の空間には、人間的な親しみが感じられた。美しい建築を見るといやな事を忘れる。あの恐ろしかったアルプス越えも半ば忘れていた。ミラノからベニスに向かった。ベニスの街は車では走れなかった。バスがわりの船に乗って、サンマルコ広場の反対側にある島のユースホテルに行った。



ミラノ大聖堂、運が良かったのか神が救ってくれたのか、無事にアルプスの山を越えられたことの感謝の祈りを私はこのチャーチで捧げた。

ベニスのユースホテルはこの寺院をリホームしたものであった。



カナルの水が歩道にまで上がってきた。この1時間後、満潮時には完全にサンマルコ広場全体が浸水した。浸水したと言うよりは、周りの建物が浮いているようだった。

古い寺院を改造したもので昔のイタリアという雰囲気があった。船と徒歩でカナルや路地の空間を見てまわった。サンマルコ広場の周辺の建物以外はそれ程、建物ひとつひとつが美しいという感じでなく、

曲がりくねった連結する外部空間の構成が良かった。ちょうどその日の午後に満潮になり、水際に面していたサンマルコ広場が、一面湖の様になってしまった。プラザの石畳の間から水が湧き出るようにあがってきたのだ。慣れているのか、用意してあった板で、棧橋を作りその上を皆歩きだした。人工的に作られたベニスの島は、少しずつ、沈んでいるという、特に、最近の下がり具合は大きいと言われている。ベニスの商人たちが、シルクロードを通して、中国や日本へと向かった頃はどうかののだろうと考えた。異なる金の価値はどうしたのだろうか？複雑な地形をしたヨーロッパの小さな国々を車で旅行すると、隣同士の国境を何度も出入りする事もあった。その度にどの金を使うのか、又、銀行を探して、トラベラーズチェックをその国の金に交換していかなければならなかった。ニューヨークの銀行で働いた事もあるなおみは、珍しい紙幣を見ながら、少ない金をやりくりして、けっこう楽しそうにやってくれた。13ヶ国の紙幣、ポンド、フランク、マルクス、ペソ、リラ等々をうまく使い分けてくれた。イタリアの金の数字の単位は大きいので、つり銭がない時にはキャンディーやチューインガムをくれた。又、イタリアの田舎町に行くと、その地方の紙幣があったのには驚いた。ベニスからフィレンツェに行く途中にボロニアという小さい街に行くことにした。見たいと思っていた建物があった。今回の旅行でスケジュールをたてて、見るべき巨匠と呼ばれる建築家アアルトの作品は大半見てきた。残るはパリの郊外に建つメゾンカレー邸とイタリアのこの小さな田舎街ボロニアに建つ小さい教会である。レノという川のそばに建つ事とリオラ教会の名前しかインフォメーションは持っていなかった。その街のいくつかある川岸をドライブしながら、通りがかりの人に本にのっている模型写真を見せながら

訊ねた。英語がまったく通じないのだが、何かわかったように場所を教えてくれたが、何もなかった。行くたびに同じ様に何度も通りがかりの人に訊ねたが、行ってみると何もなかった。もうあきらめようと思った時、それらしき物を見つけた。コンクリートの柱と梁が一体となり、曲がってゆがんだア



住居群が自然の地形にマッチするように建てられてたイタリアの中世の山岳都市

工事中、コンクリートの柱と梁のリオラ教会、アアルト設計1966年



一チ型のものが5本程建ち、多少骨組みもあった。おそらく教会が資金が集まらず工事が進まないのだろう。1974年に出版された本には工事中と書いてあったが、もう2年経っている。苦勞して探したのに、私は啞然とした。しかし、反面、私は興奮した。図面と模型写真から、全体が理解できたし、この工事中のいくつかのアーチの下に行くと、空間のスケールが感じられた。天井と壁とが一体となり、曲線の壁を作り、北側の上部に取り付けられるであろう高窓からの光は、その曲線面に反射し、照らし、やわらかい空間が出来ることは間違いないと思った。その構造体を見ながら、自分の空想で出来上がった教会を見て素晴らしい空間の教会が出来ると思った。感激に震える思いであった。完成した建物の空間よりも工事中の空間の方が、はるかに美しく感じられる時がある。

それは、相貫体とでもいうのか、骨組みの中から空間のつながりや形の複合体が読みとれるからである。教会が完成した時、もう一度、この地に来てみたいと思った。

フィレンツェの街に入った。街そのものがミュージアムの様なものであった。街の中心広場は、彫刻、大理石像が建ち、多くの建物にも彫刻（人の像）がついている。内部に入る天井から壁から、人の絵がぎっしりと描かれている。



芸術の街フィレンツェ、大理石の彫刻や像が並ぶセニョリア広場とベッキオ宮殿。



アルノ河にかかるベッキオ橋、2階建ての橋が回廊となり、橋の両側にたくさんの店が並ぶ、階上はプライベートの回廊で宮殿と宮殿をつないでいる。



街の中をふたつに分ける様、アルノ川が流れているが、そこにかかる屋根がついたベッキオ橋、橋というよりは、

ドームから見たフィレンツェの街。一番高いドーム(大聖堂)はほぼ街の中心に位置している。その屋根の上の見晴台に上ると赤茶色のタイル屋根のだけがぎっしり詰まっている街を見渡すことが出来た。

建物が川の上をまたぎ、両側の建物の延長した様に街が街が一体となっているようであった。ドームとよばれる、巨大な大聖寺院のドームは、2重構造になっており、その湾曲の間に階段があった。高い所に昇るのが好きな私は、その湾曲の階段を体をよじるようにしてドームの上のタワーまで昇った。広場、川、や屋根々々が美しかった。何ひとつとして近代的なスタイルの建物は見られなかった。

フィレンツェからローマに向かう途中にトスカーナ地方の中世の山岳都市とよばれている街々が、丘の上や、山の中腹にあった。都市という名から、人口の多い大きな街を期待していたのだ。イタリアの大小の山の街という感じであった。建物のひとつひとつの美しさや、豪華さではなく、山肌に群がる様にして建っている。街路空間の素晴らしさや、その街全体のバランスがとれた自然とマッチしている美しさであった。

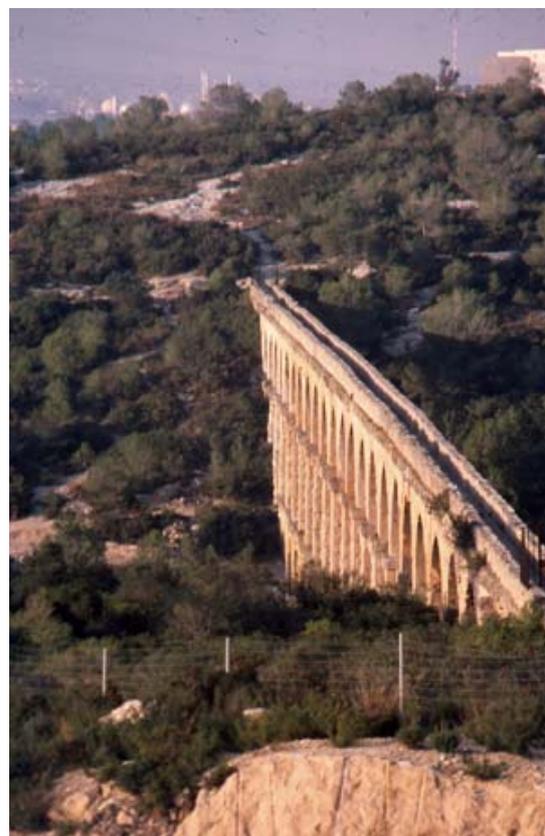
中世のトスカーナの街、シイナ、オビエト、ペリジャやアッシジ等にはプラザがあり、タワーがあり、その下に人が集まり、行事が行われる。タワーといえばサンジミヤノの街は現在は13程のベルタワーしか残っていないが、かつて栄えた中世の頃は競い合う様に権力としてのタワーを建て、70以上もあったといわれている。スケールが違うが現代の大都市に建ち並んでいる超高層ビルのスカイラインの様である。現代の超高層ビルは、経済のパワーのシンボルであるかの様に、サンジミヤノのベルタワーも、かつて中世においては、経済、宗教のパワーのシンボルであったのだろう。人は高く高くと昇りたくなるのであるか。

ローマの街、大都会に入った。しかし、街は中世そのままの様であった。



中世の超高層ビル、中世の権力、繁栄を意図するベルタワー群のイタリアの山岳都市・サンジミヤノ。

ローマに水を運んだ古代、中世の水路、水的高速道路のような橋。



フォロ・ロマーノ、古代ローマの都市の中心地。遺跡の崩れかけた円柱が美しい彫刻のように立ち並んでいた。





**いかにも古代のローマ人が歩いて来そうなアピア街道とその遺跡。  
私はこの道を車で通ったのだが馬車で通る道のような気がした。**

場等がさらに美しく感じた。それは、その崩れた石柱や壁が、彫刻的に見れるだけでなく、なんとなく、私なりに、古代の建築を空想できたからであろうか。「すべての道はローマに続く」といわれていた、その古い道のひとつの「アピア街道」が昔のままの石畳で残り、ところどころに崩れおちた遺跡が残っていた。地下のカタコンベの墓地など、紀元前300年前のものだという。古代の建築の力強さを感じさせられた。ルイス・カーンがガラスの被覆は好きでなく、構造体のコンクリートやレンガが好きである、と言った事が分かった様な気がした。

私は、古代ローマの遺跡から、ルイス・カーンのデザインの語彙となった大きなアーチを見つけた。スケールといい、デザインといい、まったく同じ様な感じがした。再び、建築におけるオリジナリティーとは何かを考えさせられた。

ローマを後にして、地中海に沿ってあるイタリアの中世の各都市や建築を見ながら南フランスに向かった。イタリアの地中海に沿って走る高速道路には岸壁をくりぬいた様な曲がりくねった細長いトンネルが数えきれないほどあった。前方を走っていた車がトンネルの中で無理に追い越そうとし、反対車線の

**ローマ、円柱の回廊の囲まれた楕円形のバチカンのサンピエトロ広場**



**現代建築のデザインのポキャブラリーとなっているローマの遺跡**

車と正面衝突をした。頭、顔から血を出した若い男女が車から這い出る様に出てきた。私の車も前の車を避けきれず反対車線に突っ込んでいってしまった。